

会長歴任

昭和四十八年 工業塗装組合役員副理事長歴任

平成十四年 工業塗装組合技能検定委員

平成元年 予科練同期会会長（八年間）

現在 学区区政協力委員

賞

昭和五十三年 愛知県知事表彰 技能業務優秀

平成五年 労働大臣表彰 技能検定推進功績

平成九年 勲六等筆光旭日章 叙勲

軍歴

十八・六・一 岩国航空隊入隊 海軍二等飛行兵

特第二期乙種飛行予科練習生

十八・九・一 海軍一等飛行兵を命ず

十八・十一・十 卒業 第三十五期飛行練習生

十九・三・二十四 卒業

十九・六・一 海軍上等飛行兵

十九・十二・一 海軍飛行兵長

二十・四・一 海軍二等飛行兵曹

二十・九・一 任海軍一等飛行兵曹（特進）

海軍航空通信兵として

福島県 池亀 誠

大正十二（一九二三）年四月十二日、池亀家の六人兄弟の次男として生れた。家業は農業で、家は会津地方の北部に位置し、北に霊峰飯豊山を朝な夕なに望みつつ岩月小学校に通学していた。当時の当地は水田が少なく、農業収入のみでは家族十人の生活は楽ではなかった。父は土工仕事や山林の作業等にも出て生計を立てていた。

昭和十五（一九四〇）年ともなると日支戦争が激しくなり、長兄は召集令状が来て出征してしまつたので、農家の仕事は自分が担当することになった。現在の農作業はほとんどが機械作業となつたけれども当時はすべてが手作業であつたので農作業は重労働であつた。父は賃取り作業に出っていたので、水田の一町三反歩の耕作は、私と母の二人が主な働き人であつた。

私は高等小学校を卒業すると青年学校に入学、もっぱら軍事教練等を教えられた。昭和十九年七月十七日、第一次合併後は喜多方市となった喜多方第一小学校で徴兵検査が実施され、私は甲種合格となった。

このころともなると戦局はますます拡大し、北は満州戦線、支那大陸戦線、そして南方戦線と、毎日の新聞やラジオ放送はこれまでの「勝った、勝った」の報道が一変して「玉砕、玉砕」の放送が流れるという不利な戦況となったのであった。

そんな戦局にあった昭和十九年九月二十日、私は横須賀第二海兵団に入団した。入団して四日間ほどすると横須賀海軍航空学校に入校することとなった。ここで三カ月間航空通信の教育を受けた。モールス信号なので初めのうちは「ツートン、ツートン」の練習ばかりで頭がおかしくなったがそんなことは言っていられない。ようやくその教育が終わると、今度は横須賀海軍航海学校普通科練習兵としての専門教育を五カ月間受け、通信兵と

して昭和二十年五月一日に卒業した。

卒業と同時に海軍航空隊に配属されて約三カ月間勤務したが、同年七月に今度は千葉県の館山海軍航空隊に転属となり、そこに勤務することになった。

ここでの勤務はラッパ手としての信号となった。初めのうちはラッパの譜を覚えるのに苦労したが、一方頬が痛くなったりした。また息を極端に吸ったり吐いたりするので、ラッパ手には肺を悪くする者もいた。

ここ館山航空隊には志願で入隊して来た少年航空兵がいて、我々のラッパ信号にて非常事態を知らせると、直ちに、まだうら若い二十歳前の少年若鷲特攻隊員が、首に白いマフラーを巻いて愛機の前に整列、出撃する。だが出撃した荒鷲機は一機として帰還して来なかった。見送った我々は何と云っていいか分からない心境であった。

敵B29爆撃機は毎日のように爆撃にきて、この航空隊にも爆弾を投下するので、防空壕作りの作

業にも追われていた。またグラマン戦闘機の激しい機銃掃射を受け逃げ回ったり、とても兵舎にいられないので山の方に避難したりして防空壕を造りながら約三カ月ここにいた。その間、本土空襲は熾烈を極め、戦局は暗雲の一途をたどるのみであった。

とうとう八月十五日に終戦となる。ただただ一同涙にむせるのみであった。我々海軍は陸軍のように武器を持っていない体一つの身であるので、昭和二十年八月二十日に解散の命令が出て、館山海軍航空隊は解散となり、実家に帰ることになった。

実家に帰ってみると先に出征していた長男はジャワ島で戦死したという。戦争はただ一片の赤紙令状によって有無を言わず戦場へと連れ行き、「生か死か」はただ運、不運とあきらめさせた軍令であった。

兄の戦死と共に必然的に自分が池亀家の後継ぎとして農家を営むこととなった。戦後は物資がな

く、厳しい生活であったが、敗戦国日本の復興を  
と皆で頑張り、日本は大国へと建て直ったのであ  
った。

我々の農作業も現在では近代化し、すべてが機  
械力に頼り、手作業などはほとんどなくなった今  
日である。土地基盤も改良され、今までの原野等  
も基盤整備で水田となり、大反別に区画され、耕  
作面積も三町歩となり、またトラクターによる耕  
運等になっている。

私は、その間農協の理事や老人クラブの会長等  
を歴任、現在は自分たち夫婦と長男夫婦、孫三人  
の七人家族で楽しく余生を送っている。

戦争を知らない若い世代の方々、そしてこれか  
ら育ち行く子供たちに戦争の悲惨さと戦争による  
犠牲を出させてはならない。戦後を今日まで築き  
上げた平和日本を、否、世界平和を、恒久に続け  
て行ってもらいたいと念じています。